

発表者 柳澤 好昭

テーマ 「一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方について」

よろしく申し上げます。緊張しています。私が選んだ「一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方」ということについて、具体的な課題、行動は原稿に書きましたので、割愛させていただいて、その背景というか、支えとなる考え方について5分30秒、お話しさせていただきます。

1つは、今日は暖かいですけれども、昨日は寒かった。子どもは風の子、童は風の子というのが先人の知恵として残っています。では子どもが本当に風の子なのかということとそんなことはありません。やはり先人たちが長年の日本の寒暖差です。子どもはもともと脆弱です。私も小学校4年生までは体が脆弱でした。これを強くするのに鍛えるということがあったわけです。ただ、先人たちは今後の対応ということを考えて、そういうことばを残したわけです。外で遊べと。ところが問題も当然出てきます。

昔、流行った一斉乾布摩擦があります。これに対応できなかった子どももいます。ここで問題になるのが、みんなにそれが合うかということです。教育心理学で適性処遇交互作用という言葉があります。教員にも学習者にもみんな一人ひとり適性というのがあり、そういうのを捉えていく必要があるというものです。実現は並大抵のことではないですが。

もう1つが「ニーズ」という言葉です。大谷選手で有名になったマンダラチャートというのがあります。あれはきれいにニーズ(needs)、段階的ゴール(goals)、ウォンツ(wants)を組み立てています。ニーズという言葉日本人は誤解していると私は思います。ニーズと、段階的ゴールと、それを解決策としてウォンツというのが生まれてくる。だからAI問題もですが、先にウォンツがあるのではなく、ニーズと、段階的なゴールの中で、どのウォンツ、つまりどういうふうなAI、あるいはITのどの部分を使えばいいのかということを考えていかなければいけないと思います。

大人になってもですけど、ニーズを全部自分で自覚できるかということ、できるものとできないものがあります。自覚することを支えていくのは教員だけではありません。家庭でも社会でも、それをしていかなければいけないわけです。

しかし、今後、社会がどうなっているか。例えば、EV自動車が2年後どうなっているかはだれにも分かりません。十年ひと昔と言われていた時代が、今1、2年でひと昔です。私たち大人もどうなるか分からないのに、まして子どもたちは、夢を見ても、なかなかニーズを顕在化することは非常に難しいです。そういう中でどうしたらいいかというと、思考力と文化力と、それから学ぶ・働くことの価値観の大切さというのを身につけることを知るこ

とが大切です。

なぜ文化力かというと、私は諸外国にいっぱい行き、仕事もしていましたが、自分の国の文化を知らない人は尊敬されません。そういう人は相手の国の文化も尊敬しないということです。それで文化力を挙げたわけです。思考力ですが、複眼的に思考きるかということです。

思考というのは言葉でするわけです。頭の中で言葉で思考しています。言葉力がない人は思考力もないわけです。ないと言ったら語弊があるかもしれませんが、あるかもしれないけれども、外に出てこない。では言葉力というのはどういうふうにするのか。これを、ましてや複眼的に思考できる力を持っていくためには、どうしたらいいのか。

例えば、「おはよう」と「グッドモーニング」があります。これ、同じ場面で使われることが多いですけれども、朝7時に友達と別れるときに、英語では「バーイ、グッドモーニング」と言えるのです。日本語では、「さようなら、おはよう」と言えません。これはなぜかかというと、グッドモーニングのほうは「I wish you a good morning」なのです。「おはよう」というのは、「あなたは早く～いいですね」なのです。視点が違うのです。こういうように、英語を勉強するだけで、文化の勉強にもなる。言葉の勉強にもなる。実際には、挨拶という情報が流れるわけですけれども。

これから外国人がいっぱい日本に来ます。日本人の間でも、男女、ジェネレーションによって文化差というのが当然あります。文化差と言ったら変ですね。考え方の違いとか、経験の違いとか。こういうのをどういうふうにやっていくのかとなったときに、情報伝達のコミュニケーション力の言葉と、気持ちや感情を伝えることができるコミュニケーションの言葉力を全教科、小中学校、大学もですけれども、していかなければいけないのです。

大人も子どもに「やばい」で終わってしまうようなコミュニケーションではどうしようもないのです。やはりきちんと伝えられるようなことをやっていきたいというのが原稿に書いた具体的な課題、行動を支える考えです。ありがとうございました。

区 長 お聞きしていて、私が思ったのは、自分の文化を知ることですね。これは今、教育現場でも昔から地域を知るだとか、日本の文化を知るといふの、やってきてはいるのだけれども、そこについては何か今、現在、課題があるというような感じなのか。

柳 澤 今、区長がおっしゃった文化の、いろんな取組が行われているのは重々承知しております。ただ、個人的な意見ですが、表層的、

氷山でいうと、見えているところをしている気がします。先ほど述べた「おはよう」と「グッドモーニング」の違いなど、深層のレベルまではしていない気がします。したらきりがありません。

区 長 でも、そういうことですね。もっと深い学びということで。

柳 澤 複眼的な思考のためにも視点の違いというのを知るべきです。

区 長 あと、もう1つは、この思考力のほうでは、複眼的な思考力が必要だということで、なぜこれが今、足りないというか、何が課題なのですかね。

柳 澤 もともと日本という国では、昔から言葉を短くする、単語を短くします。これは村社会の日本人だからということがありますね。グループ内ではいいのだけれども、外へ出たときに弱いわけです。これを何とかしなければいけない。いろんな国の言葉を知る。ここで国と言うのは、日本と外国という意味だけではなくて、例えば東京と京都もそうです。例えば、東京で「ほうる」と言うと投げること。京都で「ほおる」と言うと、捨てることです。東京では「投げる」です。同じ言葉によってで意味が違うわけです。同じ言葉、日本語でも意味が違ふと考えることで複眼的な思考力が生まれてきます。つまり、他を知ることと、己を知ること、複眼的な目ができてくる。相手が京都人でなくて、外国人であっても、あるいは女性、男性の違いであっても通じることだという意味で申し上げました。